堪えきれずにぷッと噴き出すとあとはもう抑えようがなく、しまいには行雄は腹を抱えて笑っていた。そんな行雄の様子を見て、サキも安心したように笑顔になる。

やはりとても頭のいい子なのだな、と思った。そうして、やはり「一緒にいてやっている」のは自分ではなくサキのほうなのだろう、とも思った。こんなふうに腹の底から笑うのはいったいどれぐらいぶりのことなのか、行雄には見当もつかなかった。

二、三日、サキが姿を見せない。

しばらくのあいだ汗ばむくらいに暖かい日が続いていたのに、ここ数日間雨が降り続いている。この雨で最後の桜も散ってしまっただろう。

雨が降るとガラス拭きのバイトは休みになる。行雄は日がな一日部屋にいて、雑誌を読んだりゴミ捨て場から拾ってきた映りの悪いテレビの画面を眺めたりして過ごしていた。

サキに会いたかった。

サキの顔を見たい、ということもあったけれど、行雄は新しいサキの絵を何日かかけて描いている途中だったのだ。

それはこれまで何十枚と描いてきたサキの絵の中でも、間違いなく最上の仕上がりになりそうな絵だった。出来上がったものを見たら、サキもとても喜ぶはずだ。だが、だからこそ細部の描写は実物のサキを目の前にして描きたいのだった。

いま来るかいま来るかと待ち続けているのに、サキはやって来ない。

直接隣りの部屋のドアをノックしてみようかとも何度か考えたが、今まで結局ひと言も口を利いていない隣室の女に向かって、すみませんがお宅のお嬢さんにちょっと用がありまして、などと言い出すのも気が引けた。隣室はこれまでになかったほどの静かさで、アキの泣き声もほとんど聞こえてこなかった。

――夜逃げでもしたのかな。

なぜかそんなことを考えて、行雄は滅多に開けない磨りガラスの窓をガラリと開けてみる。

窓は腰の高さだし、隣室とのあいだには目隠しのプラスティック板がしつらえられているので、そうしてみたところで隣室の様子が見えるわけでもないが、行雄はそれでも腰高の窓から身を乗り出すようにして隣室を窺い見た。

何も見えない。わずかに見えるのは窓の桟の部分でしわくちゃになって丸まっている汚れたカーテンの裾だけだ。窓の丈とカーテンの長さが合っていないのだろう。

荒れてささくれ立った隣室の女の生活を垣間見てしまったような気分になって、行雄はふと目をそらした。サキはあんなところで暮らしているのだ、と思った。しかしそんなことを言えば自分の部屋にはカーテンさえ付けられてはいず、行雄はなんだかやりきれなくなる。